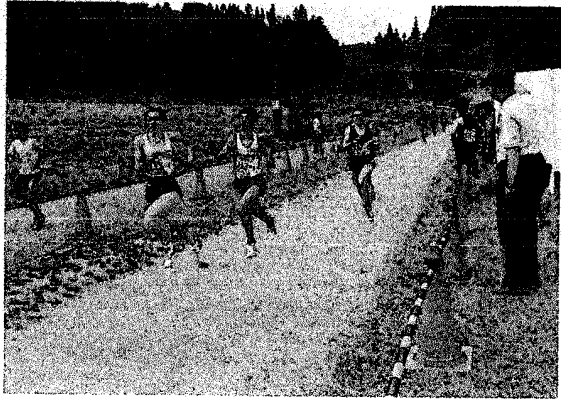


風

富田守男
⑩
「現場」からの



駅伝競技の醍醐味(だいごみ)やたすきと絆、素晴らしい感動を得るため、来年は会場で声援を送りませんか

全国的に猛烈的な暑さとなり、7月26日。白馬は、7月の観測史上最高の34.9度を記録。その厳しい気象条件の中、長野冬季五輪会場を走る「第17回白馬スノーハープクロスカン トリー大会」の競技役員として岡田係に当た

員として参加する機会があった。熱中症対策の水分補給を促す場内放送が幾度となく流れる会場。レース前の緊張も重なり救護所も慌しみが伝わってくる。初日は、9部門に分かれての駅伝競技、2日目は個人種目だ。参加者は2300人、県外からの参加者も多い。運営スタッフは行

多くの関係者が協力し合って継続することの大切さを考えてみませんか

る。多くの選手への声援や、話をすること、身近に選手と接すること、それができた。誰もが言葉にするのが、芝居場の環境の良さとコースのハードさだ。小中学生が1・5時、高校・一般が4時の距離。駅伝競技では短めな距離だ。スタートから全力で走る選手が、最初のうり坂ですぐに選手の顔が極端に苦しくなっていくのが分かる難

コース。上りや下り、カーブが連続するコースは、オリンピックコースとして国際スキー連盟が要求した国際的な難コースだ。十分な練習を積んできたが、今回も苦戦した。後半の上り坂まで走力が続かなかったの声が多い。こんな環境で練習して見た

いこの選手。しかし私が知る限り、会場ではスノーハープの魅力の種々の情報発信や、合宿を誘致する場面に

は出会わなかった。大会関係者、選手の宿泊事情を尋ねたが、ハッキリした返事は聞

こえてこないし、会場周辺の観光協会も関係者も素直に把握して

ないようだ。だが選手と話をすると「昨日泊まりました。今日泊まって、慰労会を盛大に」との声も多かった。

私たちが所属する白馬村、壮年ソフトボール連盟は、5人が参加して岡田係に当た

い。お互い体調を崩す時期もあったが、助け合う夫婦の姿に心のぬくもりを感じたのは私だけではないはずだ。

お互いの趣味はマラソン。大助師匠が倒れるまで、ボルルマラソンに毎回参加していた事でも知られている。

今年、吉本マシヨナルDREAMSメンバーを招待したことがきっかけでの参加のよう

今年も大会を盛り上げるゲストやゲストランナー。その中でも「よしもとクリエィティブ・エージェンシー所属の富川花子師匠」の音場だ。富川大助師匠との夫婦しゅべくの漫才で知る人も多

また50歳代だが、独特な話術が会場を包み込み、スタート10秒前まで盛り上げるプロ意識に驚かされる。

マシヨナルの野尻あずさ選手、オリンピック出場の地元出身の成瀬野生さん、オ

大規模な大会のスターターを務めるチャンスは貴重な体験の機会だ。大会をより告知する機会と考えるみてはどうだろうか。

個人レース8.5の部門参加者に声援している。うれしそうに華を上げながら「私、今年68歳」と横顔の笑顔でゴールに向かう女性(NPPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)